
恐怖

宇ノ鹿 すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐怖

【コード】

N8800M

【作者名】

宇ノ鹿 すい

【あらすじ】

どんだんとドアを叩かれたらこわい

部屋が簡潔的過ぎて良くない。まったくもって良くない。なんとか生きてきた証が部屋野中でその密度が薄いにも程がある。そういうわけで、もっと部屋を自分らしくコーディネートしたいなーと思っているけれど、残念なことに面倒臭いと思う気持ちが勝っていて体が動かない。

そういうわけで今日も明日も明後日も永遠に部屋は簡潔なまま。だから部屋に関することに言っでは全く成長しない。魅力的なお部屋にならない。残念なことに。

そもそも面倒という気持ちがあればこんなことにもならないのだ。

では面倒というその正体を暴かなければならない。

そんなことを考えている最中に呼び鈴が鳴った。誰だよ、と思って覗き穴を覗いてみると誰も見えない。ハハー見えない所に潜んでいるやがるな、お前俺にとってどうでもいいやつだろ、邪魔だよ失せろよ失せてくれよ、ってなわけで俺は居留守を決行するが、また呼び鈴が鳴る。

一度ではない…二度、三度と……

なんだか途中から怖くなってきたから、枕を抱えてガタガタ震えていた。するとドン！ とドアが激しく叩かれた！ ヒツ、と身を固くしてしまった俺のことなどお構いなしに、ドン、ドン！ とどんどん激しくなる。やばいんじゃないかな、って思っていたが、怒声などは聞こえてこない。野太い借金取りみたいな男の声とか、そういうものが聞こえてくるわけではなく、ただひたすらに呼び鈴とドアを叩く音が、交互に繰り返される。

怖

俺は慎重に布団の元に忍び足で駆け寄り、頭から覆いかぶさって居留守を続行。

静まるまで難を逃れようと思った。

静まるまで。静まるまで……。

怖い

そしてやがて俺が目を覚ました時、布団から頭を亀のように突き出すと、目の前に真っ赤な卵が置いてあった。なんでこんなところに？ って疑問に思っていると、その卵に鮮血のヒビが入って、割れたの。すると中から流れ出てきたのが、何ていえば言いんだろう、目玉みたいなやつだった。だけどその正体とかわからないから、俺はその卵を握りつぶしたんだ。すると目玉がギョロつと俺を見てきて、で、破裂したの。目玉が。

ピンポーン

しつこいなって思つて、俺は嫌になつて頭を抱え込んだ。で、叫びたい衝動に駆られたから、窓を勢いよく開けて叫ぼうと思つたの。ていうか、ベランダに出てさ。そしたらさ、ベランダに出て、ちょっと下を見下ろしたら、女の人がいたの。普通の女の人。

その人が片手を上げて俺に挨拶してくるから、俺も答えたの。片手を挙げて挨拶したの。

で、彼女はそのまま笑つて、どっかいつちやつた。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ピンポンピンポン

いい加減しつこいなって思って、振り返ったの勢いよく。振り返るとドアを睨み付けることは出来るからさ。でもさ、俺は驚いたの。

ドアが開いてたんだ。何時の間にか。

普通ドアが開いたりしてたら気が付くもんじゃん、音するし。だけど俺は気がつけなかったし、さっきの普通の女もグルだったんかなとか思った。そうじゃなきゃ俺にドアが開くの気が付かれるじゃん。だけどベランダに出たのは俺の意思だったなあ。

でも衝撃的だったのは。

開いたドアのところに、誰も立っていないってこと。

俺はさ、当然誰かがいるのだと思ってたんだよ。ドアの向こう側にはさ。だけど、すでにドアが開いてるってのに誰も姿を見せないの。ドアの向こう側に広がっているのはアパートの壁のコンクリだけでさ、人間が突っ立ってたりとかしないの。誰もいないの。だけどピンポンピンポン鳴り続けてんの。止まらないわけ。ずっと。

俺は友達のいたずらかな、って思って、でもやっぱり怖いから、慎重に近づいていったの。ドアに向けて足を向けていったの。で、さ、ドアノブに手が届くくらいの位置にまでたどり着いちゃったわけ。で、そこで問題が起きたの。

一度も止まることがなかったピンポンがさ、その中途半端な位置でさ、止まったの。

静かになったの。静まり返ったわけ。俺がドアノブの位置にまで来ているところでだよ？

思い切って飛び出たよ。外側に。向こう側に。

そしたらさ、やっぱり誰もいない。

だけどさ、右側に顔を向けたらさ、いたの。奥側に。

女の人。さっきの普通の女の人が立ってたの。向こう側に。

で、挨拶してんの、俺に向けて。笑いながら。

で、勢いよく走ってきて、俺の目の前まで今、来てる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8800m/>

恐怖

2011年11月13日20時30分発行